

「イエスよ、わたしを思い出してください」

イザヤ書 第55章 6節～13節
ルカによる福音書 第23章 32節～43節

説教 森島 恵 牧師

(日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会)

「シャローム!」、神の平安と、主イエス・キリストの恵みが皆様の上にありますようにお祈り致します。神様の祝福を互いに祈り合うことをもって、礼拝に臨めることは何と幸いなことでしょう。ここから感謝致します。

私は50年以上前に大阪教会で養われ、神学校に送り出された者です。この度大阪教会に帰って来て、教会のあちこちに手を触れるとき、かつて御言葉を頂き、育かれた日々を思い起こして胸が熱くなります。

かつて新しい『讚美歌21』が発行された時に覚えようと、CDを聴きながら車を運転していた時のことです。とても気になる曲がありました。『イエスよ、私を思い出してください。』(21-112 “Jesus, remember me!”)です。犯罪人が十字架上で主イエスに言った言葉です。

十字架上の主イエスの言葉が、聖書に記され、伝えられています。二人の犯罪人が、主イエスの両側に十字架につけられました。十字架につけよと人々の叫ぶ声が響く中で、主イエスは「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているか知らないのです。」と、とりなしの祈りをなさいました。すぐかたわらであざける声が響きます。「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」。

長居伝道が始められた頃、私の家には6人の兄弟の他に、戦災孤児3人が家族として引き取られ、一緒に生活をしていました。とても貧しい大家族家庭でした。その様な生活にも拘らず、両親は積立貯金や生命保険を解約して、長居伝道のために献金をささげました。私は、そういう親の姿にいたたまれない思いを抱きました。

1年半余り、わたしの魂は、嵐の中に置かれているような時を過ごしました。そのような懐疑的信仰が何の解決も得られないまま、聖書を勉強しようと神学校に行く決心をしたのです。献身とは程遠い自分の姿でした。

懐疑的な心を抱えたまま、神学生時代を過ごす不信仰な私の前に、やがて夫となる人が現れました。教派の違うこの人は、「十字架の信仰を語るあなたには喜びがないではないか。あなたの希望はどこにあるのか。」と繰り返し問いかけてきました。「主イエスの復活の出来事、そして今なお、わたしたちのために天にて神様にとりなしの祈りを続けて下さっている事を、あなたはどうか信じているのか」。十字架の主の贖いを信じて、自分が赦されて生かされていることを受け入れられない私

でした。何と長い間、回り道を彷徨っていたことでしょう。長い時を経て、復活信仰に生きる確かな喜びが与えられて、私は癒され慰めを与えられました。そして、主が再び来て下さることを待ち望む信仰へと、立ち返らせて頂きました。

「イエスよ、私を思い出してください」という一人の犯罪人の言葉が歌になり、私の魂に響いてきます。主は彼のこの願いに「はっきり言っておく。あなたは今日、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と応えて下さいました。

「十字架につけよ」と叫ぶ群衆の中に、私がいいます。十字架にかけられてなお、「あなたがメシヤならば」と叫ぶ犯罪人の中に私がいいます。しかし、もう一人の犯罪人が主イエスから受けた言葉が、今も私を捕らえて離しません。

復活の主イエス・キリストは、聖霊を通して私をとらえ、「主の復活を喜び、自分の罪の赦しを確信させ、再臨の主を心から待ち望む者」として下さいました。与えられているいのちを喜んで生きる者へと私を変えて下さいました。

「イエスよ、御国においてになるときに、イエスよ、わたしを思い出して下さい。」ここで揺れる信仰の友に、この賛美の歌を届けます。「あなたは今日わたしと一緒にパラダイスにいる」と約束された復活の主の真実が、あなたを、私をとらえて離さないでしょう。

今日、私がここに立つために、多くの人が、そして主イエスご自身がとりなしの祈りをつづけて下さいました。信仰は、一人で自分のものとすることはできません。教会に集まり、教会のとりなしの祈りの中で、二人、三人の群れの中で、私たちに聖霊が注がれ、確かな信仰が与えられ、養われていくのです。

私たちは神の民です。恐れの中に閉じ込めようとする力の中でなお、全幅の信頼をもって主イエスに従い、歩いていくことができます。どんなことがあっても奪い去られることのない確かな慰めがあります。生きているときも、死ぬときも、わたしのただ一つの慰めは、身も魂も、わたしが真実の救い主イエス・キリストのものだからです。世の終わりまで共にいると約束して下さった主のみ言葉を信じて、この命の道を歩み続けてまいりましょう。

(記 岡村 恒牧師)